

Reports of Science and Engineering,  
Saga University, Vol. 40, No.1, 2011

## 歴史的町並み保存における避難経路の確保に関する研究 - 肥前浜宿の住民ヒアリングを通して -

宮本尚美 \*・三島伸雄 \*\*・田口陽子 \*\*\*

## RESEARCH ON SECURING EVACUATION ROUTES IN PRESERVATION OF A HISTORIC TOWN

- Based on the resident interview in Hizen-Hama-Syuku -

By

Naomi Miyamoto , Nobuo Mishima and Yoko Taguchi

**Abstract:** A historic town is a town that is weaker to the disaster than a general urban area. But it isn't hoped that the road will be widened for the preservation of such a historic town. Moreover, it is necessary to know how the residents think evacuation routes, because the problems of towns are different each other. Therefore, this research aims to clarify the realities and the problems of the evacuation routes through the interview to the residents in Hizen-Hama-Syuku, Kashima City of Saga. On the interview and the analysis the realities of the evacuation routes and the problems of securing the evacuation routes in a plural direction of each site could be clarified and resident's consciousness and robustness to the evacuation were shown.

**Key words:** evacuation routes , historic town , interview

### 1. はじめに

重要伝統的建造物群保存地区（以下、「重伝建地区」という。）などの歴史的町並みは、木造建築物が密集し街路も狭く、全国平均以上に高齢化が進行しているため、一般的市街地より火災などの災害に弱い町である。また、町並みによって抱える課題は異な

り、住民がどのように避難経路を考えているかも知る必要がある。そこで本研究では、特に防火上の課題を多く抱えている佐賀県鹿島市肥前浜宿（以下、「肥前浜宿」という。）を対象とし、住民ヒアリングを通して避難経路の実態と課題を明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究対象地について

肥前浜宿では、平成18年7月に「浜庄津町浜金屋町」と「浜中町八本木宿」の2地区が重伝建地区に選定された。それぞれ、在郷町と醸造町で、2.7mにも満たない狭隘な道路沿いに茅葺きの町家も並んでいる。

---

平成23年5月6日受理

\* 工学系研究科都市工学専攻

\*\* 都市工学専攻

\*\*\* 都市工学専攻

○ 佐賀大学工学系研究科

一方で、この2地区は都市計画区域にあり、その大部分は準防火地域に指定されている。そのため、保存計画の遂行に向けて、準防火地域の解除や建築基準法の緩和条例の制定を予定しており、代替措置として保存物件を準耐火建築物と同等以上にするもののほか、避難経路の共有などを検討している。

以上のように肥前浜宿では避難経路を住民間で共有する必要がある、住民が考える避難経路やその実態、課題を明らかにすることは重要である。

非伝統的建造物は保存計画としての重要度はないが、地区全体の避難性能を上げること、修景を図って町並みに合わせていくときに避難経路を確保することが望まれることなどの理由から、非伝統的建造物についても検討を行う。



写真1 狭隘な路地に建ち並んだ建物  
(肥前浜宿「浜庄津町浜金屋町」)

### 3. 研究の方法

肥前浜宿で重伝建地区に指定されている2地区の住民に対して、ヒアリング調査と、それを踏まえた空間実態調査を行った(全69件)。その結果を、大きく伝統的建造物(複数棟立地する場合<13件>、単棟立地する場合<27件>)、非伝統的建造物(単棟立地する場合<29件>)に分け、敷地ごとにデータシートにまとめ、避難経路の分析を行った。避難経路については、現地調査と「伝建報告書<sup>(3)</sup>」を基に町並み保存を加味して考察、改善策の提案を行った。

### 4. 避難経路の実態

伝統的建造物である調査物件は、浜中町八本木宿地区28件、浜庄津町浜金屋町地区12件の計40件である。非伝統的建造物である調査物件は、浜中町八本木宿地区20件、浜庄津町浜金屋町地区9件の計29件である。(図1参照)ここではそれらのうち、峰松幸四郎家と峰松忠士家を事例にあげ、避難経路の実態を示す。

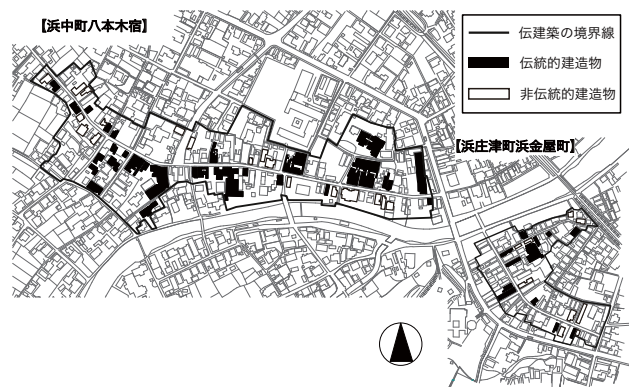


図1 調査物件

峰松幸四郎家・峰松忠士家共に、浜庄津町浜金屋町地区に位置しており、前面の路地は幅員1.5m未満と非常に狭く、周辺は建物が密集して立ち並んでいる。



図2 対象物件周辺図

#### (1) 峰松幸四郎家(伝統的建造物)

ヒアリング相手は79歳の女性である。

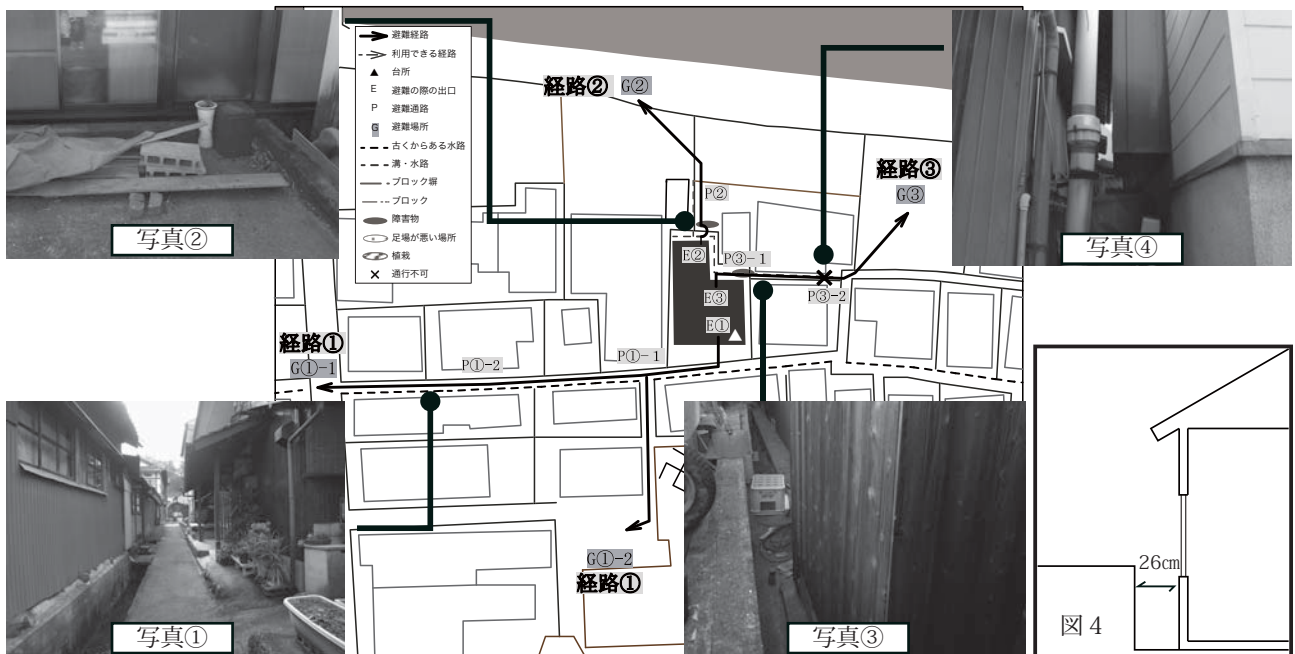


図3 峰松幸四郎家の避難経路図

#### ■聞き取りによる避難経路

玄関を出口とし、路地（幅員：1.5m未満）を通り道路（幅員：4m未満）に避難するか、路地（幅員：2m未満）を通り浄立寺に避難する＜経路①＞。窓を出口として、川沿いの道路に避難する＜経路②＞。窓を出口とし、建物間を通り駐車場に避難する＜経路③＞。経路②・③において、被験者は足が不自由なため窓から外に避難できるか不安を持っている。被験者の息子は、避難可能であると被験者は判断している。（図3参照）

#### ■避難経路の問題点（敷地の空間実態を考慮して）

経路①は、法的には不十分であるため、避難は可能である。路際には水路が流れ、建物自体がセットバックしているため路の明るさはある。しかし、幅員が1.5m未満と非常に狭いため、他の経路を確保することが望まれる。経路②は、出口となる開口部幅（250cm）は十分で一階座敷床との高さは20cm、河川改修で残地になっている隣地が地盤面を上げているため外から見ると窓と隣地がほぼ同じ高さにある。しかし、外壁と隣地の間には幅26cm高さ1m近い溝がある（図4参照）。隣地には木板等の障害物

があり、避難の妨げとなっている。経路③も、開口部の幅（170cm）は十分であるが、経路②と同様の状況である。さらに、敷地外で建物間が非常に狭い部分を通る必要があり、被災時に塞がる可能性も高く、緊急時の避難はほとんど困難である。

#### ■避難経路の問題点（住民を考慮して）

住民は高齢であり、足の不安も持っている。経路②③は、出口が高窓で隙間もあることから、高齢者である被験者の避難はほとんど不可能であろう。

#### ■考察

当該敷地は接道義務を果たしていないが、幸い前面空地があるため、二項道路指定したまま保存修復することになっており、幅員1.5mもない前面の路地はそれ自体が歴史的価値を有しているものとして維持されていく予定である。そのため、住民の安全を確保するためには別の避難経路を検討し、二方向避難を確保することが望まれる。そういう中で、経路③は敷地外の部分で通行不可能であることから、経路②他の改善策を考える。

#### ■改善策の検討

応急措置としては、建物内部に足台、隙間に渡し

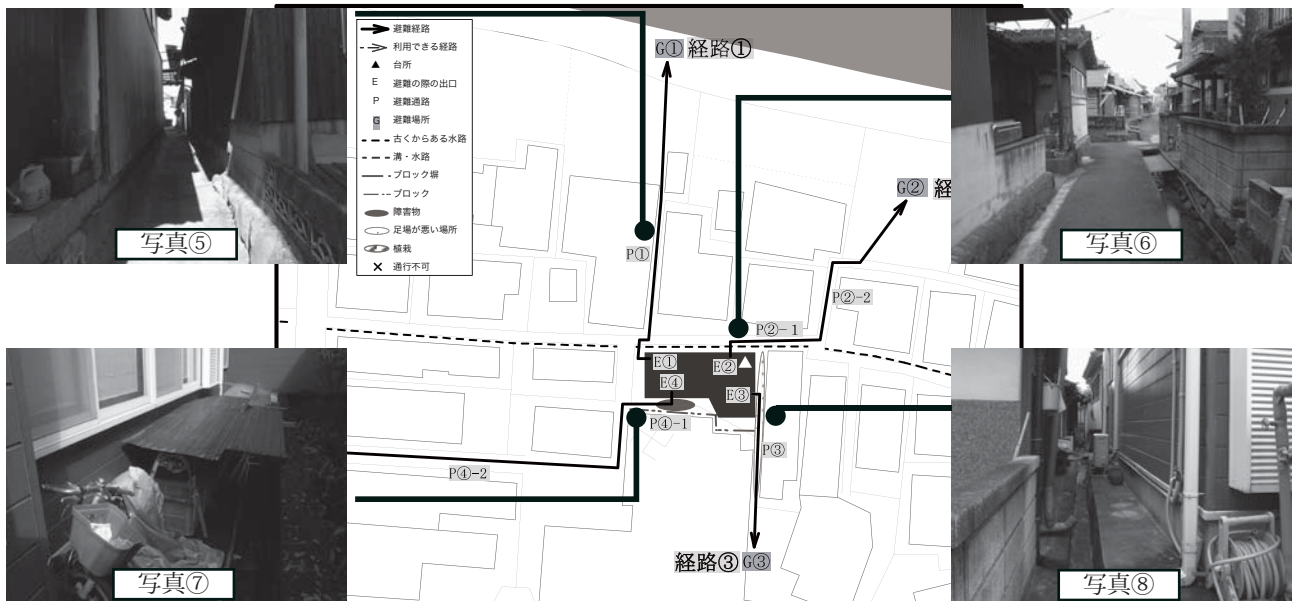


図5 峰松忠士家の避難経路図

板の準備、障害物の撤去などがある。しかし、建築的には不十分であるため、建物の履歴を十分に調査して、保存部分と利活用部分を明確にした上で、利活用部分に避難経路を確保することも考えられる。例えば、利活用部分を設定して、そこに歴史的価値を損なわないように新たな出入口を設けることが考えられる。

## (2) 峰松忠士家（非伝統的建造物）

ヒアリング相手は30代の男性である。

### ■聞き取りによる避難経路

被験者は、避難経路を4つ挙げた。玄関を出口とし、前面にある路地（幅員：1.5m未満）を通り広場に避難する＜経路①＞。勝手口を出口とし、路地（幅員：2.5m未満）を通り駐車場に避難する＜経路②＞。窓を出口とし、参道を通り道路（幅員：4m未満）に避難する＜経路③＞。窓を出口とし、建物間を通り別宅の庭に逃げる＜経路④＞。（図5参照）

### ■避難経路の問題点（敷地の空間実態を考慮して）

経路①は、法的には不十分であるが、避難は可能である。路際には水路が流れ、周囲の建物がセットバックしているため路自体も明るい。しかし、幅員が1.5m未満と非常に狭い。経路②も、経路①と同

様に避難可能であるが、路地幅員が2m未満・1.5m未満の部分もあり、非常に狭くなっている。

一方で経路③は、出口の開口幅は十分であるが、高窓（地盤よりの高さ：80cm）になっているため、被災時にはよじ上り下りしなければならない。また、窓の下に自転車などの障害物が置いてあり、避難の妨げとなっている。経路④も、出口の開口幅は十分であるが高窓（地盤よりの高さ：60cm）となっている。また、建物間に木片などが積んであり足場が悪い。このように、経路③④については、避難経路としての問題があることが明らかになった。（図3参照）

### ■避難経路の問題点（住民を考慮して）

ヒアリングを行った被験者はまだ30代であったが、その父親は高齢者である。したがって、特に経路③と④においては、出口が高窓であり、また窓の下に障害物が置いてあって通路となる部分は足場が悪いなど、被験者の父のような高齢者にとっては安全な避難は難しい状況である。

### ■考察

当該敷地は、接道義務を果たしていない。前面の路は幅員1.5mしかなく、二項道路に指定されているため大規模な模様替えや増改築時にはセットバック



クが必要になる。修景建物でも道路内建築を認めるかどうか大きな問題としてあるが、路自体が歴史的価値を有しているので拡張することは望ましくない。いずれにせよ安全性の観点から2方向以上の避難経路確保の検討を行うことが望まれる。

現状では、4経路中2経路が問題を抱えているが、経路①②は路地に面しており、別方向に抜けて避難することができる。そのため、2方向避難は経路①・②で最低限確保されていると言える。より安全性を高めるためには、経路③④で避難経路としての性能の向上が望まれる。

### ■改善策

経路③④を避難経路としての性能を確保するためには、まずは日用品の撤去や整理を行う必要がある。また高窓に関しては、当該建築物が非伝統的建造物で歴史的価値を有していないため、改修を行って出入りができるようにすることは問題ではない。あとは、修景基準との整合性ならびに内部の使い方との関係を検討していく必要がある。

## 5. まとめ

### (1) 避難経路の実態

住民の避難について、これまで外側からの目視だけでは分からなかった避難経路や住民の避難に対する意識について知ることができた。

本論では、伝統的建造物である峰松幸四郎家と非伝統的建造物である峰松忠士家を例として、避難経路の実態を明らかにし、改善の検討を示した。調査全体では、伝統的建造物27件中12件について避難経路確保が難しく、履歴にない改修の検討も必要であった。非伝統的建造物では29件中23件は複数の避難経路を確保できるが、本事例のようにより安全性を高めることが望ましいものもあり、6件については2方向以上の複数経路を確保するために改修が必要な建物があった。(図6参照)

被験者が考えている経路は、実際には避難不可能であったり、避難が困難である経路などもあり、そのなかには、高齢者には困難かつ危険であると考え

られるが、水路やブロック塀を乗り越えて避難したり、屋根から飛び降りたり屋根づたいに避難するという経路もあった。意外な住民の考えは、ある意味で新たな発見であったが、現実的でないところに課題がある。

以上のように、肥前浜宿のような歴史的町並みの避難経路の実態と課題をを明らかにすることができた。

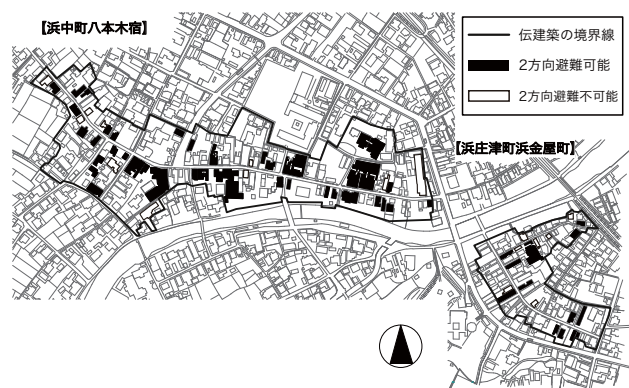


図6 調査対象物件における2方向避難の確保状況

### (2) 今後の研究課題

今後の研究課題としては以下の3つがあげられる。

- ①ヒアリング相手によって意識差や年齢差、体力差がある。そのことを加味した分析を行う必要がある。
- ②今回の分析では敷地別に分析を行ったが、相隣の問題や避難所施設へのルートも含め、地域として総合化していく必要がある。
- ③②の総合化を通じて、避難経路が不十分な建物や敷地は勿論、地域全体の避難・防災性能の向上に向けて、より有効な対策を検討する。

### 参考文献

- (1) 鹿島市教育委員会：「肥前浜宿 鹿島市伝統的建造物群保存対策調査報告書」，鹿島市，1999年
- (2) 森田智暁（2006）：「既存不適格建築物の実態からた鹿島市肥前浜宿の町並み保存における課題について」，佐賀大学卒業論文
- (3) 鹿島市編纂委員会：「鹿島市史」上・中・下巻，鹿島市，1974年